

令和 7 年 3 月

世田谷区立緑丘中学校

校長 小林 智明様

世田谷区立緑丘中学校

学校関係者評価委員会

令和 6 年度学校関係者評価委員会報告書

本年度の学校関係者評価を以下のようにまとめましたので、報告いたします。学校関係者評価委員は校長先生が掲げた「学校経営方針」の「学校の教育目標」や「目指す学校像」を踏まえて、それらがどのように子どもや保護者に受け止められているのかの検証を行いました。学校を多角的に把握するために「生徒・保護者・地域を対象としたアンケート調査結果」、先生方による「自己評価」、先生方と学校関係者評価委員との間で行われた「教職員ヒアリング」などを総合して評価を行いました。以下、令和 6 年度の「学校経営方針」の基本方針と方策に沿って、主な項目について所見を述べさせていただきます。

I. 基本方針と方策について

(1) 学習指導の充実 「教育 DX と探究的な学びに重点を置く」

「学校経営方針」では、主体的に学ぶことを目標とし、指導方法として教育 DX を掲げている。生徒へのアンケート（以下、生徒アンケートと表記）を見ると、項目 1 に学習に関する質問があるため、それらを中心に検討する。例えば「先生は、課題について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている」という質問に対して、どの学年も肯定的な回答（「とても思う」「思う」の合計）で 9 割を超えている。この点について、生徒は実感していると言える。教員の自己評価を見ても、同様の項目は 9 割を超えている。

しかし、保護者へのアンケート（以下、保護者アンケートと表記）の同じ項目を見ると、肯定的な回答が合計して 6 割から 7 割程度となっている。これは否定的な回答が多いわけではなく、「分からない」の回答が 2 割から 3 割を占めていることから、保護者へは生徒・教員ほどは伝わっていないことが読み取れる。それは「本校は、丁寧に指導している」という設問について、保護者が肯定的な回答を 8 割から 9 割程度していることから、教員・学校への評価が高いことから窺える。なお、探究的な学びについては学年で違いが見られ、「疑問に思ったり、興味を感じたりすることを進んで調べている」という設問に対し、肯定的な回答が 6 割から 8 割となっていた。DX についても同様の傾向があり、生徒・教員の肯定的な回答が 8 割から 9 割なのに対して、保護者の回答は 5 割から 7 割程度である。

(2) 生活指導の充実 「自他を敬愛し、協力し、責任感の強い生徒」の育成

生徒アンケートの「仲間や友達を大切にしている」という項目については、どの学年も肯定的な回答が9割近くあり、かなり意識されていることが読み取れた。教員も人権に配慮して生徒に接しているという項目で9割程度の肯定的な回答があった。保護者についても同様の傾向があり、同様の項目について、肯定的な回答が9割近くあった。

しかし、生徒アンケートの自由記述欄には、いじめを受けているという記述や「いじめを注意しあう」という記述が全体の1割程度散見され、先の回答とずれがあることも考えられた。これらについては、アンケート調査で把握することに限界があるため、別途検討していく必要があると考えられる。

教職員ヒアリングにおいて、いじめについて質問したところ、学校側としても上記の問題意識は持っており、いじめの原因としては生徒間のコミュニケーション不足・問題があるのではと考えられていた。いじめ予防としてコミュニケーションの問題に取り組んでいくことも考えられるが、学校で対応していくことにも限界があると考えられる。そこで、IVの総合所見にも述べたが、地域と連携していく中で生徒同士のコミュニケーションが活発になることも必要ではないかと考えられる。

(3) 豊かな心の育成「自ら考え、正しい判断や行動のできる生徒」「挨拶、言葉遣い、表現力などが身についた生徒」「生命を尊重し、人の心を思いやる生徒」の育成

学校関係者評価委員会の検討の際にも、挨拶について多くの意見が寄せられた。そのため、ここでは挨拶を中心に検討する。これらの項目は、項目間で回答に差が見られた部分でもあった。

生徒アンケートの「進んであいさつをしている」という項目に対し、肯定的な回答が9割近くを占めており、かなり意識されていることが分かる。学校関係者評価委員会でも、緑丘中学校の生徒はよく挨拶をしてくれる、という肯定的な意見が目立った。その一方で、「自分には自信をもてるものがある」という項目に対し、肯定的な回答は6割から7割程度となっている。他には、「悪ふざけやトラブルがあると互いに注意し合える」という項目については、肯定的な回答が5割から8割程度と学年で開きが見られる。学年が上がると肯定的な回答が増えることから、教員の指導の成果だと読み取ることもできる。

これらから読み取れることは、教員の指導によって、挨拶等を意識的に行っている一方で、自尊感情が高まっているとは言い難い。それらの原因として、(2)でもあったようにいじめ等の問題があり、それらについて自身が注意できていないという意識があるのではと思われる。これらの関係については、アンケート調査から判断が難しいこともあり、今後の課題だと思われる。

(4) 進路指導の充実 「自己理解ができ、自分の進路を選択できる生徒」の育成

進路指導の充実として、キャリア・パスポートの活用が述べられているため、ここではキ

キャリア・パスポートについて述べる。どの学年もキャリア・パスポートについては肯定的な回答が7割前後を占めている。なお、保護者も肯定的な回答が5割から6割を占めており、同様の傾向がみられる。教員の自己評価を見ても、9割程度の肯定的な回答があり、全体的に取り組んでいる傾向が読み取れる。

その一方で、学年による差が大きい項目もあり、例えばキャリア教育について「学ぶことが楽しい」という設問に対して、1年生・3年生では否定的な回答（「あまり思わない」「思わない」の合計）が2割程度なのに対して、2年生は4割程度ある。これは、3年生はキャリア教育を意識してくることや、現在の1年生は小学校の頃からキャリア教育を受けてきている違いが表れていることも考えられる。

Ⅱ. 共通項目アンケートの評価

共通項目アンケートについては、生徒・保護者・地域の方々と3つに分けて評価を行った。主に上記にふれていない点を中心に述べる。

①生徒アンケートより

令和6年度の本アンケートの回収率は、どの学年も8割を超えており、高い回収率だったと言える。項目5の「先生たちは、生徒が相談しやすい」という項目について、1・2年生は6割程度が肯定的な回答が得られたのに対し、3年生では8割程度の回答が得られていた。その一方で、保護者アンケートの同様の項目を見ても同様の結果があり、生徒と保護者の共通理解がある項目と言える。教員の自己評価でも同様の傾向が見られ、この点については共通認識があると言える。

②保護者アンケートより

保護者アンケートの回収率は、5割前後であり、昨年度と同様の傾向が見られた。ただ、本委員会に興味を持っていただくきっかけにもなることから、回収率の向上は目指していきたい点である。また、保護者と生徒で意識に差が見られる項目があった。例えば項目6の学び舎との連携については、生徒は「分からない」との回答は1割前後であったが、保護者は3割前後となっている。この項目については、生徒アンケートで否定的な回答が6割前後であり、実施されていないと感じていることが読み取れる。その一方で保護者アンケートでは否定的な回答が2割から3割前後と開きが見られた。この点は後述するように、地域との連携を増やしていくことで共通認識を高めていく必要があると考えられる。

③地域の方々のアンケートより

地域の方々の回収率は3割程度であった。これは昨年度と同様の傾向であったと言える。全体的に肯定的な回答が8割前後を占める等、学校への評価が高いことが窺える。その一方で、目立っていたのが、地域との連携に関する項目であった。例えば、学校協議会や学校運

営委員会に関する設問では、「分からない」が4割を占め、否定的な回答を合わせると、6割近くになっている。これらについては、生徒や保護者の自由記述からも見られる内容であり、3者が課題と感じている部分もあると考えられる。

Ⅲ. 教員による自己評価について

教員による自己評価については、項目が多岐に渡るため、上記の内容と関連する内容を述べる。まず「学校経営方針」について、明確に示されていると回答（「とても思う」「思う」の回答）した教職員の割合は100%であり、教職員に共有されていると理解できる。

教員から課題に挙げられていたのが、学校の活動を保護者等に伝えることであった。これは保護者の自由記述や前述の地域の方々からの回答でもあったが、学校としての課題であると言える。しかし、現在では学校からの発信は行われており、こうした回数を今より増やしていくことについては、効果の点からも疑問がある。

Ⅳ. 学校関係者評価委員会としての総合所見

今まで検討してきたことをまとめ、総合所見としたい。アンケート結果を見ると、3者の意識が一致している項目も多かったが、意識に開きが見られた項目もあった。特に地域との連携については、3者とも課題意識が見られたので、この点について取り組んでいくと、3者の認識も近づいていくのではないだろうか。

学び舎との連携については課題に挙がっているが、実際には部活動の交流などは行われている。他にも、生徒が地域の防災ボランティアに参加し、高い評価を得ている等、地域と学校の交流は行われている。これらの活動をより展開していくには、3者の活動を増やしていくことが重要ではないだろうか。例えば、地域の活動に小学生、中学生、保護者が関わっていくことでそこで交流が生まれ、学校と地域の連携が深まっていくことも考えられる。そうした活動に保護者等も参加していくことで、生徒や学校の理解もふかまっていき、より生徒の豊かな成長につながっていくのではないだろうか。

令和6年度 世田谷区立緑丘中学校

学校関係者評価委員会

委員長 高石 啓人

委員 櫛田 枝里子

委員 永田 理恵

委員 西崎 圭子

委員 野島 千栄

委員 三浦 美里